



大正時代上海に於ける「支那風俗研究会」について ： 井上紅梅による白話小説翻訳作業の前史として

著者	勝山 稔
雑誌名	国際文化研究科論集
号	21
ページ	126(17)-113(30)
発行年	2013-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/57003

大正時代上海に於ける「支那風俗研究会」について

——井上紅梅による白話小説翻訳作業の前史として——

勝 山 稔

はじめに

日本における「麻雀普及の祖」として知られ、大正時代から昭和初期（戦前）にかけて中国通俗文化の紹介者として活躍した中国風俗研究家・井上紅梅（いの上こうばい）（一八八一―一九四九?）には、従来看過されていた「別の一面」があった。

その別の一面とは、他ならぬ中国小説の日本への紹介である。彼は明治以降殆ど顧みられていなかった中国白話小説の翻訳を数多く手掛けたほか、日本では当時無名の存在であった魯迅の小説集（『呐喊』『彷徨』）を翻訳した『魯迅全集』（改造社版）^{〔一〕}を出版するなど、日本に於ける中国白話小説と中国近代小説の受容に大きく貢献した。

この井上紅梅が、なぜ当時の日本で冷遇・等閑されていた白話小説や魯迅の小説に注目したのか。それについては従来殆ど研究が行われていない。井上紅梅の先行研究としては、三石善吉氏^{〔二〕}や、符麗紅・三宝政美氏による考察^{〔三〕}が見られるが、三石論文は支那通研究^{〔四〕}の一環として後藤朝太郎と共に考察したため、紅梅の支那通側面のみ注目したにすぎず、一方の符・三宝論文は、膨大な井上紅梅の著作の中のごく一部を取り上げて、紅梅の全体像をと

らえようとしているので、やや偏りが見られる。

そのため筆者は、従来使われていなかった井上紅梅に関する様々な資料を収集・分析し、彼の業績の再検討を試みている。

以下小論では、上海で彼が設立した「支那風俗研究会」の会誌『支那風俗』を取り上げ、彼が中国風俗研究から中国白話小説へと、研究の方向転換を行う契機となった『支那風俗』停刊の問題について検討することとしたい。

一 支那風俗研究会会誌『支那風俗』について

支那風俗研究会は、大正七年四月に井上紅梅（以下「紅梅」）が、上海で設立した研究会である。正確な活動終了時期の把握は難しく、いつ解散となったのかは資料的解釈によって多少ずれが生じる。ただ、会の活動を知る手掛かりとなる会誌の刊行状況を目安とすると、事実上の最終号となった第四巻第一号の刊行が大正十一年一月であるところから、研究会の活動期間は実質的には五年余りという判断が可能である^{〔五〕}。

その支那風俗研究会の活動内容を知ることの出来る資料が、二つ

大正時代上海に於ける「支那風俗研究会」について——井上紅梅による白話小説翻訳作業の前史として——

の『支那風俗』である。

一つ目は、支那風俗研究会の会誌『支那風俗』である。本誌は大正七年四月に創刊し、



図 1：支那風俗研究会『支那風俗』創刊号表紙

- 第一卷（一～六号）大正七年四月～大正七年一〇月
- 第二卷（一～六号）大正八年一月～大正八年一二月
- 第三卷（一～二号）大正九年一月～大正九年二月
- 第三卷（三～六号）大正一〇年八月～大正一〇年一二月
- 第四卷（一号）大正一一年一月

の合計一九冊の刊行が確認され、現在日本国内外で所蔵が確認できるものは、全一九冊中一八冊である〔六〕。本誌は上海という「外地」

で出版されたこともあり、日本国内で本誌を所蔵する図書館が極めて少ない。しかも一括して所蔵する図書館はなく、各地の図書館に少数の雑誌が分散している状態である。

もう一つの『支那風俗』は、大正九年一二月から大正一〇年五月にかけて上海文路にある邦字出版社・日本堂書店から紅梅が個人名で出版した書籍版『支那風俗』である。（以下混用を避けるために両者を「雑誌『支那風俗』」「書籍版『支那風俗』」と略称する）この書籍版『支那風俗』は合計三冊〔七〕が刊行された。



図 2：井上紅梅著『支那風俗（上巻）』標題

- 『支那風俗（巻上）』（日本堂書店、大正九年一二月）
- 『支那風俗（巻中）』（日本堂書店、大正一〇年四月）
- 『支那風俗（巻下）』（日本堂書店、大正一〇年五月）

本書は支那風俗研究会の会誌『支那風俗』の中で、紅梅個人が執筆した箇所をもとに再編集したものであり、日本でも広く流通し、当時の朝日新聞にも紹介^{〔八〕}されている。そのためか現在でも多くの図書館に所蔵されているほか、二〇一〇年にはリプリント版^{〔九〕}も出版されたため、比較的容易に入手できる。

そのため、先行研究の多くは、この書籍版『支那風俗』を使用しているが、実は雑誌『支那風俗』と書籍版『支那風俗』の収録内容は完全には一致していない。書籍版は、雑誌『支那風俗』三巻二号（大正九年四月二〇日）発表後に、雑誌の出版を一時中断して刊行されたものであり、雑誌『支那風俗』が再開されたのは、その一年四ヶ月後である。そのため書籍版には、雑誌『支那風俗』三巻三号（大正一〇年八月）以後の内容は収録されていない。また研究会の運営状況について、紅梅は会誌巻末の「編集だより」に記載することが多いが、この記載は書籍版では全てカットされている。紅梅による白話小説の翻訳作業について、初期の事例を紹介すると、

- 『金瓶梅と支那の社会状態（上）』（大正一二年三月）
- 『金瓶梅と支那の社会状態（中）』（大正一二年七月）
- 『金瓶梅と支那の社会状態（下）』（大正一二年一〇月）
- 『新訳今古奇観』（大正一三年一月）
- 『今古奇観』所収「薄情郎」（大正一五年四月一日～四月一七日）
- 『今古奇観』所収「蝴蝶夢」（大正一五年四月一八日～四月二五日）
- 『今古奇観』所収「移花接木」（大正一五年五月二七日～七月

二日）

- 『今古奇観』所収「鴛鴦譜」（大正一五年七月一八日～八月一〇日）

- 『今古奇観』所収「珍珠塔」（大正一五年八月一日）

- 『今古奇観』所収「義還原配」（大正一五年八月一九日～八月二八日）

- 『今古奇観』所収「孝女藏児」（大正一五年八月二九日～九月二四日）

- 『儒林外史』（大正一五年一〇月一五日～昭和二年三月三一日）

○……日本堂書店刊行

○……日刊支那事情社『日刊支那事情』紙上連載

とあるように、雑誌『支那風俗』の停刊（大正一一年一月）から一四ヶ月後の大正一二年三月に『金瓶梅と支那の社会状態』の刊行を開始している。書名からは研究書を類推させるが、内容は各章に「訳余間談」として語釈や解説を備えた翻訳書である。本書は紅梅の業績中でも有数の大作で、三分冊合計一〇〇〇頁を優に超える。これだけの翻訳を進めるには相当の準備期間が必要であるから、恐らく紅梅は雑誌『支那風俗』の停刊後、直ちに白話小説の翻訳作業に取りかかっていると見なして間違いないだろう^{〔一〇〕}。

そのため彼の白話小説の翻訳活動を把握するには、従来未解明であった支那風俗研究会の活動停止に至る経緯を知る必要があり、それを知るには、書籍版に収録されていない雑誌『支那風俗』の内容を精査しなければならないのである。

以上の問題の所在に則り、筆者は各地に現存する雑誌『支那風俗』

大正時代上海に於ける「支那風俗研究会」について——井上紅梅による白話小説翻訳作業の前史として——

一八冊を調査し、誌面に記された様々な記事を収集・分析を行い、支那風俗研究会の活動停止に至る経緯について考察することとした。

二 支那風俗研究会の発足

紅梅が上海の邦字新聞社である上海日日新聞社に入社したのは大正四年の秋で、それから約二年間、彼は新聞記者として勤務していた^{〔十二〕}。一介の新聞記者がなぜ研究会を設立し、中国の風俗研究を志したのか。

紅梅の回想^{〔十三〕}によれば、風俗研究の発端は、紅梅の友人・欧陽予倩^{ようようよせん}から紹介されたジャーナリスト・余穀民^{よこくみん}の影響が大きかったという。

余穀民は、早稲田大学出身で後に有力紙『晶報』の社長や、中華連合通信社の創設者を歴任した中華民国維新政府の要人で、大正一〇年四月には上海に訪れた芥川龍之介と面会した文人の一人でもある^{〔十四〕}。余氏が紅梅と面識を得た当時、彼は新聞報の記者や日刊紙『神州日報』の編集長であったため、相互に記事の情報を交換する間柄となったが、両者は次第に懇意となり、紅梅は「支那の遊芸や風俗についていろいろ貴重な教えを受けた」^{〔十五〕}という。

そして大正七年四月、紅梅は「支那の人情風俗、趣味嗜好に関する諸般の事項を調査研究するを以て目的」^{〔十六〕}とする支那風俗研究会を設立させる。研究会は上海武昌路一七五号に支那風俗発行所を構え、邦字雑誌『支那風俗』を創刊する。

創立当初、支那風俗研究会の研究活動に理解を示し、支援を約束

する篤志家も少なくなかった。『支那風俗』が書籍として再刊された時の「序文」によると、有力週刊誌『上海』や『上海週報』を刊行する春申社社長の佐原篤介をはじめ、金風社代表で詩人の島津四十起（長次郎）、上海日本堂書店社長・飯田雄三、上海経済日報社社主・深町作次郎。実業界からは横浜正金銀行上海支店長で後に頭取となる児玉謙次、同じく横浜正金銀行の椎本文也、三菱銀行支店監査役の大南徳之亟、上海日本人実業協会の安原美佐雄。研究者では中国陶磁研究^{〔十七〕}の上田恭輔、『支那政黨結社史』^{〔十八〕}や上海日日新聞社主筆の柏田天山、『十九世紀外交史』^{〔十九〕}の平田久、『対支国策論』の著者で上海日日新聞社社主の宮地貫道^{〔二十〕}、イプセンの翻訳で著名な千葉鉞蔵。その他にも洋画家の石井柏亭、医学者で詩人の木下奎太郎、石井医院の石井政吉^{〔二十一〕}院長など、上海邦人社会の有力者が数多く名を連ねている。他にも前述の余穀民、小説家の張春帆^{〔二十二〕}のほか、劇作家の馮叔鸞や欧陽予倩^{〔二十三〕}の名前も見え、特に欧陽予倩は「お国の人は偉らい。他人の仕事でも之れは面白いと思へば潔く援助する。支那では中々そういふわけにはゆきません」在上海邦人の紅梅に対する熱心な支援振りに感嘆^{〔二十四〕}している。

機関誌『支那風俗』は、支那風俗研究会の会員による調査報告を原則とし、会誌創刊に際しては、広く風俗関係資料の収集が行われ、井上良平、大南徳之亟、佐々木大介、神戸光吉、張春帆、包天笑、杜次珊、孔靄如、余穀民、欧陽予倩、陸爽など新聞記者や小説家、著名在留邦人などが積極的に協力した。

その成果もあり、創刊号は合計九名の執筆陣を擁し、講談説書の紹介やその台本の紹介、小説「九尾亀」の邦訳、京劇の紹介、上海の歴史、苗族図説、中国の礼儀作法、花柳辞典など豊富な内容を誇つ

た。

これを受けて雑誌『支那風俗』には投稿が殺到し、「予定紙数百頁を超ゆる事十八頁に至つたのは、偏に誌質の充実に忠なるの余りである。尚おそれが為め、会員諸君の努力になった趣味多き文稿の一部分を次号に廻したのは遺憾であつた」^{〔三十四〕}と紅梅が編輯便りに書いている。

支那風俗研究会会則第四条には「雑誌支那風俗は毎月一回十五日に発行」^{〔三十五〕}とあるように、雑誌は毎月の刊行を目指していたが、月刊が実現したのは一卷三号までで、以後は一時期を除いては隔月のペースで刊行が行われている。それも当初の一年目は上田恭輔や余穀民、張春帆、歐陽予倩などの寄稿で支えられていたものの、会員の寄稿が一巡した二年目からは慢性的に投稿が少なく、それ以後の雑誌記事の大半は、発起人である紅梅の寄稿で成り立っていた。紙幅の制約もあり詳述は避けるが、例えば『支那風俗』第二巻には、紅梅が寄稿した原稿の脱稿日の記録が残っている。それを示すと、

(二) 二巻二号用寄稿文)

大正八年三月二二日「七珍八宝」脱稿

大正八年三月二五日「支那劇とは何か」脱稿

大正八年三月二八日「小説九尾亀」脱稿

(三) 二巻四号用寄稿文)

大正八年七月四日「芝居者の習慣」脱稿

大正八年七月一五日「紅樓夢」脱稿

大正八年八月三日「梅龍鎮」脱稿

大正八年八月七日「衣裳と道具」脱稿
大正八年八月九日「京戯と人物」脱稿

(四) 二巻五号用寄稿文)

大正八年九月七日「支那戯趣味」脱稿

大正八年九月二日「桑園会」脱稿

大正八年九月一三日「丑表功」脱稿

大正八年九月一四日「紅樓夢」脱稿

の通り、紅梅は雑誌『支那風俗』の寄稿のために連日連夜執筆に追われていた様子がわかる。後年紅梅自身が会誌を「自分のひとり雑誌」^{〔三十六〕}と回想しているのも決して誇張ではなかったのである。

三 雑誌『支那風俗』の停刊

ただ、個人的な努力だけでは限界があり、支那風俗研究会の経営状況は、徐々に不安定化していったことが、各種の資料から確認することが出来る。

第一には、支那風俗発行所のめまぐるしい住所変更があげられる。当時の上海の状況を知ることが出来る『支那在留邦人名録』によると、刊行二年目の大正八年には、支那風俗発行所の所在地は雑誌奥付と異なる福建路^{〔三十七〕}とあるが、翌大正九年には密勒路新康里^{〔三十八〕}、大正一一年には文路日本堂気付^{〔三十九〕}となっている。

また紅梅も創刊半年後から四馬路周辺で転居を繰り返して、大正八年には歐陽予倩の紹介で淡水路に一時落ち着いたが^{〔四十〕}、四ヶ月後

大正時代上海に於ける「支那風俗研究会」について——井上紅梅による白話小説翻訳作業の前史として——

にはそこも引き払い、その後の連絡先は上海経済日報社気付となり^{【三十二】}。以後三年間紅梅の上海における所在地は判然としない。

第二には、印刷所の度重なる変更があげられる。大正八年七月には印刷所の蘆澤印刷所とトラブルを起こし、雑誌印刷を上海経済日報社に変更^{【三十二】}、翌九年四月には更に大阪の関西印刷所に移し^{【三十三】}、大正一〇年八月以後は再び蘆澤印刷所に戻っている。

紅梅もこの事態を深刻に受け止めたのか、大正八年十一月の「編輯便り」では「雑誌の経営困難」を明言、同時に非会員からの原稿募集と寄附金の募集を開始し^{【三十四】}、販路拡大のために上海に限られていた販売拠点を東京・大阪・大連へと拡大^{【三十五】}した。

また内容面でも特集記事を盛んに企画した。例えば第二巻第二号から五号にかけて「支那劇特集」を、第三巻第二号に「中国女性の特集」に取り組んだほか、第二巻第六号では「賭博の特集（賭博の研究）」を発表、それが結果的に現存する日本語で書かれた最も古い麻雀解説書となったのは、既によく知られている^{【三十六】}。

しかし、この種の経営努力も裏腹に経営は依然として思わしくなく、大正八年十一月には突如次号（二巻七号）刊行の打ち切りを発表、大正九年一月に「普通号の三倍」の増刊特大号を刊行すると背水の陣で予告^{【三十七】}を出す、それも失敗^{【三十八】}する。そして経営はいよいよ苦しくなり、三巻二号（大正九年四月）から雑誌『支那風俗』を停刊している。

雑誌停刊後、紅梅がまず行ったのは、書籍版『支那風俗』の刊行である。

彼は雑誌『支那風俗』の蓄積を活用し、『支那女研究香艶録』（大

正九年四月）^{【三十九】}、『支那風俗（上）』（大正九年十二月）^{【四十】}、『支那風俗（中）』（大正一〇年四月）^{【四十二】}、『支那風俗（下）』（大正一〇年五月）^{【四十三】}と相次いで書籍を出版する一方、日本に帰国し^{【四十三】}、日本への漢方薬の輸入も手がける^{【四十四】}など、資金作りに奔走している。

なお、（雑誌『支那風俗』と異なり）書籍版『支那風俗』は、日本でも多く販売され、当時の日本の知識人に中国社会を知りうるルポルタージュとして歓迎された。例えば大正一〇年、芥川龍之介が大阪毎日新聞社の海外視察員として中国に派遣され、上海を初め南京、洛陽、北京、天津などを周遊したが、芥川の記述には、

その間にさつきの花寶玉が、ちよいと次の間から顔を出した。支那の藝者は座敷へ出て、五分ばかりすると帰つてしまふ。小有天にゐた花寶玉が、もう此處にゐるのも不思議はない。のみならず支那では檀那なるものが、——後は井上紅梅氏著「支那風俗卷之上、花柳語彙」を参照するが好い。

と書籍版『支那風俗』^{【四十五】}を紹介しており、当時から中国の風物や風俗を詳述する情報源として日本の知識人に重用されたのである。

しかし寄附金を広く募集しながら突然停刊した紅梅の判断は、その後紅梅の支援者から激しい非難を浴びる結果を生んだ。例えば上海邦人社会の著名人で、支那風俗発刊時の支援者に名を連ねていた金風社の島津四十起^{【四十六】}は、雑誌『支那風俗』の経営が傾き始めた大正八年秋には、島津自身が刊行する『上海案内』（金風社）の改訂にあわせて支那料理の企画を提案^{【四十七】}するなど、支那風俗研究

会を物心両面で支えていた人物である。

その彼は『上海案内』の第九版を刊行した際に「邦人案内」の中で雑誌『支那風俗』と紅梅を紹介している。それには、

支那風俗は編者自ら或は支那旅館に宿り或は支那民家に同居し……支那風俗研究に全生活を没頭して発行せる月刊誌にして支那研究資料として邦人の一般より厚き歡迎を受け何人も編者井上紅梅氏に多大の賛辞と感謝を表せり、一部五十銭なり^{〔四十八〕}。

と雑誌『支那風俗』の編者・紅梅の奮闘振りを紹介している。

島津の『上海案内（第九版）』に井上紅梅と雑誌『支那風俗』が紹介された経緯については、関係する資料が少なく、島津の意図については、大きく二つの推測が考えられる。

第一の推測は、紹介された記事の文面の通り、島津が紅梅を支援する目的で『上海案内（第九版）』に掲載したという考えである。『上海案内』は、上海の沿革と名所案内のほか、鉄道の時刻表や上海在留邦人の職種・住所・電話番号が詳細に記されている。そのため上海の在留邦人には生活情報書として活用されたが、それにもまして内地の読者からは屈指の上海旅行ガイドブック^{〔四十九〕}として重宝していた。

そのため、本誌にて支那風俗研究会の活動を紹介することで、島津は内地の読者層へ広く雑誌『支那風俗』をアピールし、少しでも販路を拡大させる意図があったと思われる。ところが島津の『上海案内（第九版）』が刊行された時、雑誌『支那風俗』は既に停刊、発

起人の紅梅に至っては既に日本へ帰国しているという有様であった。これでは島津も開いた口がふさがらなかつたであろう。

また第二の推測は、『支那風俗』の停刊（大正九年四月）から、『上海案内（第九版）』の刊行（大正一〇年二月）まで、一〇ヶ月あいている点に注目した考え方である。つまり、島津が同じ上海市内の雑誌の停刊を一〇ヶ月間も気付かなかった方が寧ろ不自然である。そのため、島津は雑誌『支那風俗』の停刊を重々承知の上で、散々寄付金を集めながら——例えば停刊直前の『支那風俗』三巻二号巻末の一〇三頁にも「共鳴 左の諸氏の本会の主意に賛同せられ次の如く寄附ありたり」として九名の篤志家の名前が紹介していた——無断で突然停刊した紅梅に対して、強い皮肉を込めて『上海案内（第九版）』に雑誌『支那風俗』と編者である紅梅を紹介し、『支那風俗』を復刊せざるをえない状況に彼を追いつ込んだとも考えられる。

以上の通り、島津による掲載の意図は二種類の推論が可能であるが、何れの推論でも行き着く結論は同じである。前者であれば掲載後の結果として、後者であれば掲載の動機として共通してうかがえるのは、島津が紅梅に対して強い不満の念を抱いていたという点である^{〔五十〕}。それを裏付けるように島津四十起の『上海案内』は、その後も改訂版を頻繁に刊行し続けているものの、それ以後、本書で井上紅梅ならびに雑誌『支那風俗』が紹介されることは二度となかった。

大正一〇年八月、紅梅は一年四ヶ月振りに雑誌『支那風俗』（三巻三号）を再刊したが、本号巻頭で一面に大きく「支那風俗継続の辞」を掲載した。それには、

暫く休んでゐたので共鳴筋から大分お小言を頂戴しました。今度は毎月欠かさず出します。どうぞ其の積りで当てにして御覧下さい【五十一】。

とある。しかし、この時点で大半の支持者が離反し、再刊後に本誌に寄稿した協力者は小説家の張春帆と、新参の上原公六の二名にすぎなかった。

会の経営状況については、詳しい記録がないので不明点多すぎる。入会者数の推移が判明すれば良いが、支那風俗研究会については入会者数の記録が断片的で把握しにくい。

ただ雑誌に掲載される広告数の推移から研究会の凋落振りの一端は理解できる。広告主のほとんどは上海在留邦人が経営する会社や企業であったが、例えば第一巻第一号の広告数は三二件、第二巻第一号では二六件、第三巻第一号では二一件と、広告件数はほぼ二〇件を維持している。しかし復刊後の第三巻第四号では六件、第三巻第六号では四件、そして事実上の最終号となった第四巻第一号では僅か二件にまで減少している。要するに紅梅は上海の在留邦人社会から信用を失ったのである。

これは、紅梅側の記録からも同様の傾向を裏付けることが出来る。既然大正八年四月の段階で紅梅は、上海の生活に「倦み劳かれ」「愛想が尽きそうになってきた」【五十二】と述べているほか、同年九月にも支那風俗研究会の支援者から紅梅が「近頃大分評判が好くない」【五十三】ことを自ら認めている。

また大正八年九月から大正一〇年九月まで、紅梅は自らの住所を

明らかにしていない【五十四】。その理由については、彼自身明言を避けているが、雑誌『支那風俗』停刊中に紅梅が交友の深い寺田寅彦に語ったこととして、彼にとつて大正八年来の出来事は「辛酸」【五十五】であつたと吐露している。

そして、大正一〇年六月に紅梅は再び中国へ戻ったが、上海を素通りして、生活の拠点を南京に移しているところからも、彼の上海で置かれた立場が理解できよう。

その後も紅梅は、南京で雑誌『支那風俗』の刊行を続けるが、南京に転居してから半年後、『支那風俗』四巻一号（大正一一年一月）をもって停刊している。

停刊の理由としては、既に今まで述べてきた通り、第一には上海日本人社会からの協力を得られなくなった点があげられる。そして第二には紅梅自身の関心の変化があげられる。紅梅は雑誌『支那風俗』を介して様々な中国風俗に関する旺盛な調査報告を行った。他会員の投稿が少なかったこともあり、「想へば大正七年一月このかた自分は無茶苦茶に支那のことを書いた」【五十六】とある通り、彼は雑誌刊行を維持するために超人的努力を払わなければならず、そのために書いた原稿は大正九年四月の段階で既に「四六版でザッと千二百頁ほどの容量となつた」【五十七】とある。また雑誌の寄稿内容から見ても、彼が関心を持つテーマのほとんどは、この時点で既に書き尽くした感があつた。

そのため大正一五年における紅梅自身のコメントによると、南京に転居した一九二二年からは、支那風俗研究会で目指した支那五大娛樂たる「喫・喝・嫖・賭・戯」に関する研究ではなく、「純粹の支那風俗」に関心を抱き、「唐宋元明清」の文芸に「没頭」する時期に

入ったと彼自身書き記している〔五十八〕。

そして紅梅の白話小説への関心を決定付ける契機となったのが、南京在住で蘇州語を解する畢碧梅^{ひつへきばい}との結婚（大正十一年四月）である。この結婚を契機に、ここから彼の二〇年以上にわたる白話小説の翻訳が始まるが、それについては別稿に委ねることとしたい。

結 論

本論の内容は以下の通りである。

I 中国風俗研究家として知られていた井上紅梅は、明治以降停頓状態にあった中国白話小説の翻訳を数多く手がけていたほか、日本では無名の存在であった魯迅の小説集を翻訳した『魯迅全集』（改造社版）を出版するなど、中国の通俗小説と近代小説の受容に多大な貢献をもたらしていたが、これまで彼の業績は看過されていた。そのため彼が上海で発足させた「支那風俗研究会」を取り上げ、彼が白話小説の翻訳を手がける契機となった、雑誌『支那風俗』の停刊の経緯を検討することで、彼の業績の再評価に向けた基礎的考察を行うこととした。

II 紅梅が上海の邦字新聞社・上海日日新聞に入社したのは大正四年の秋で、それから約二年間、彼は新聞記者として勤務していた。彼が風俗研究を志した発端は、紅梅の友人・歐陽予倩から紹介された『神州日報』の編集長・余毅民の影響が大きかった。

会誌『支那風俗』は、新聞記者や上海在留邦人の積極的な協力によって創刊したが、二年目からは慢性的に投稿が少なく、それ以後は発起人である紅梅の寄稿で雑誌刊行を成り立たせる事となった。

III その後の特集企画などで再起を図ったが経営は思わしくなく、大正九年四月から雑誌『支那風俗』を停刊した。その後彼は雑誌『支那風俗』の蓄積を活用し、相次いで書籍を出版する一方、日本に帰国し日本への漢方薬の輸入も手がけるなど、資金作りに奔走している。

IV しかし広く寄附金を募集しながら突然会誌を停刊した紅梅の判断は、その後紅梅の支援者から激しい非難を浴びる結果を生んだ。その後、雑誌『支那風俗』再刊したものの、この時点で大半の支持者が離反、支那風俗研究会に広告を依頼する在留邦人も激減し、紅梅は上海の在留邦人社会から信用を失ったのである。

V 会誌『支那風俗』停刊の理由としては、第一には上海日本人社会からの協力を得られなくなった点があげられ、第二には紅梅自身の関心の変化があげられる。紅梅は雑誌『支那風俗』を介して様々な中国風俗に関する旺盛な調査報告を行ったが、寄稿内容から見ても既に書き尽くした感があった。

そのため南京に転居した大正十一年からは、支那風俗研究会で目指した支那五大娯楽たる「喫・喝・嫖・賭・戯」に関する研究ではなく、「純粹の支那風俗」に関心を抱き、唐宋元明清の文芸に没頭することとなり、彼の二〇年以上にわたる白話小説の翻訳が始まることとなった。

本稿は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（B）「海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究」、及び基盤研究（C）「戦前期において支那愛好者が果たした文化受容活動の実証的研究」の研究成果の一部である。

注

- 【一】井上紅梅訳『魯迅全集』（改造社、一九三二年）。
- 【二】三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」（橋川文三他編『近代日本と中国（下）』朝日新聞社、一九七四年）。
- 【三】符麗紅・三宝政美「井上紅梅和中国」（『国際経営・文化研究』五巻一号、二〇〇一年）。
- 【四】「支那通」は、主に戦前期において中国語を解し、中国社会に精通した中国愛好者を原義的に指す。萩野脩二氏の言によれば、この時期の「支那通」は、荒尾精や宮崎滔天などで想起される明治時代の「大陸浪人」の如く中国で業績を上げるのではなく、中国で業績をあげる者のために知識を提供することを旨とした。そして、その知識は科学的学問的というよりも、より実態に近い中国社会の実状の紹介に主眼が置かれ、自ずと社会的風俗的に中国を捉えるようになったという。萩野脩二「支那通」について（『中国研究月報』五五四号、一九九四）三五頁参照。
- 【五】なお、紅梅は大正一五年一月に『紅い土と緑い雀』を刊行し、出版者を支那風俗研究会としている。これを会の活動の最後と見做すと、活動期間は合計八年半となるが、『紅い土と緑い鳥』の奥付を見ると、著者である井上進（井上紅梅の本名）と発行所である支那風俗研究会の住所が上海開北大陸路六十五号で一致しているので、紅梅の個人的な活動の範疇を超えない。また会誌停刊から本書刊行までの三年間、会としての実質的な活動の記録は確認できない。なお金風社編『支那在留邦人人名録』の「上海在留邦人名簿索引欄」によると、支那風俗刊行中の井上紅梅は「井上進上海風俗発行所（一一版、大正九年六月）」、「井上進 上海風俗著者（一三版、大正一一年八月）」と表記されるが、大正一二年七月発行の一四版から昭和三年四月発行の一九版までは「井上紅梅（支那風俗研究者）」と記

載されている。そのため、遅くとも大正一二年七月の段階で支那風俗研究会の活動は停止していた可能性が高い。また『紅い土と緑い雀』の内容も「本記事は昨年の夏、上海日日新聞紙上に連載したもの」を「上梓した」（『紅い土と緑い雀』自序）とある通り、紅梅の上海日日新聞に掲載した記事によって構成されているので、本書は支那風俗研究会の成果ではなく、紅梅個人の著作と判断できる。

- 【六】『支那風俗』一卷二号は、現存するものは確認できない。一卷二号が刊行された大正七年五月には、元実家である井上商店の店主・井上安兵衛（旧芳蔵）の死去（五月一六日）と葬儀（五月二一日）があり、紅梅も参列していた可能性も否定できない。寺田寅彦の日記大正七年五月一九日条には「井上安兵衛（旧芳蔵）去る一六日死去、明後二十一葬儀の由通知あり」とあり、同じく寅彦日記大正七年五月二〇日条には「四時井上に行きて見舞を述べ、金蔵君の外は昔の馴染はあらず、進氏の息九歳なるが、寄辺なげなるも哀れなり。明日高田万蔵院にて葬儀の筈」（『寺田寅彦全集二〇』）岩波書店、一九九六年）一七五頁参照。
- 【七】『支那風俗（巻上）』（日本堂書店、大正九年一二月）の紅梅自身による序文には「増補し改訂し上下二巻に分つて出版することにした」とあるので、当初の計画では上下二分冊で刊行する計画であったことが判る。
- 【八】大正一〇年五月二日東京『朝日新聞（東京版）』朝刊第四面「出版界」「支那風俗巻上（井上紅梅著）」著者は自ら上海の支那人の家庭に寄食して現代支那の生活を体験し研究せる人真面目なる研究態度は著者を知るものの等しく体感する所なり……支那の人情風俗を知る外読物として面白きものなり（金三圓、上海文路日本堂書店）、大正一二年七月六日『朝日新聞（東京版）』朝刊第七面「出版界」「支那風俗巻中（井上紅梅著）」中篇は賭博及び芝居の研究を集めたり共に実際に就いて見ざれば興味尠く了解し難き

ものなれど説明の間に挿話を交へ殊に芝居に就ては台本数種の訳をも加へたれば読物としての興味もあり研究の独自にして精緻に互れるは上篇と等しく敬するところなり（金三圓、上海文路日本堂）

【九】『アジア学叢書（二一五）支那風俗』（大空社、二〇一〇年）。

【十】なお、紅梅による中国近代小説の翻訳は、大正一五年五月一八日付『日刊支那事情』に掲載された「支那の新文芸——張資平『寒流』」が嚆矢であることが確認されている。張資平『寒流』の翻訳発表は、『金瓶梅と支那の社会状態（上）』刊行から更に三年二ヶ月後のことである。また白話小説の翻訳作業を行っていた時の紅梅は、当時の中国の新文芸について「過渡期中途半端なハイカラがった作品」と批判し、紅梅自身「新文芸に対しては甚だ冷淡であった」（紅梅「支那の新文芸——張資平『寒流』」『日刊支那事情』大正一五年五月一八日条参照）と述べており、本論で扱う雑誌『支那風俗』の停刊と（紅梅の）中国新文芸への関心は直接的な関係を持たない。そのため本論では紅梅の中国近代小説の翻訳については割愛した。

【十一】島津長次郎『支那在留邦人名録（八版）』（金風社、一九一七年）上海在留邦人名簿索引欄参照。

【十二】紅梅「暗殺の都・上海」（『週刊朝日』三五卷二号、一九三九年一月一八八—一九一頁参照）。

【十三】西田禎元「芥川龍之介と上海」（『創大アジア研究』一七号、一九九六年）七頁参照。

【十四】紅梅「暗殺の都・上海」（『週刊朝日』一八九頁参照）。

【十五】「支那風俗研究会則」（『支那風俗』一卷一号、一九一八年）一一八頁参照。

【十六】上田恭輔『支那陶磁の時代的研究』（大阪屋号書店、一九二九年）。

【十七】竹内克己・柏田天山『支那政黨結社史（上）（下）』（崇文閣、一九一八年）。

【十八】平田久『十九世紀外交史』（民友社、一八九七年）。

【十九】宮地貫道については、村上勝彦「長江は第一線にして、滿蒙は最後の塹壕なり——宮地貫道の事跡について（その一）」『東京経大学会誌 経済学』二五九号、二〇〇八年）参照。

【二十】石井政吉医師は文人としても知られ、内山完造が結成した「文芸漫談会」の中心人物として活躍し、晩年の魯迅の治療も担当している。

【二十一】張春帆は江蘇常州出身の小説家。名は「炎」、筆名は「漱六山房」で、上海の各種新聞や雑誌に小説を発表。代表作は『九尾亀』『黑獄』『新果報録』『宦海』『反倭袍』など。一九三五年没。

【二十二】欧陽予倩は、一八八九年湖南省瀏陽県出身の俳優で劇作家。河合武雄の影響をうけ、早稲田大学に留学時に在日中国留学生の劇団春柳社に参加、二七歳で專業俳優となり梅蘭芳と並び称された。田漢、洪深らと一九二二年に上海戲劇協社を創立。三〇年代より左翼演劇運動に入り南中国各地で活躍、解放後は戲劇家協会副主席をつとめた。

【二十三】紅梅「序」（『支那風俗（上巻）』（日本堂書店、一九二〇年）二頁参照）。

【二十四】雑誌『支那風俗』一卷一号、「編輯便り」参照。

【二十五】雑誌『支那風俗』一卷一号、一一七頁参照。

【二十六】紅梅「自序」「支那に浸る人」（日本堂書店、一九二四年）二頁参照。

【二十七】島津長次郎『支那在留邦人名録』一〇版（金風社、一九一九年）には「支那風俗発行所 井上進（東京府） 福建路大陸旅館隣一三九号」とある。

【二十八】『支那在留邦人名録』一一版（大正九年）上海在留邦人名簿索引欄「井上進（上海風俗発行所）」、上海企業索引欄「支那風俗発行所 井上進（東京府） 密勒路新康里」

【二十九】『支那在留邦人名録』一三版（大正一一年）上海在留邦人名簿索引

欄「井上進（上海風俗著者 在南京）」、上海企業索引欄「支那風俗発行所 月刊雑誌 著者 井上進（東京府）文路日本堂気付」

【三十】「昨年の夏頃から自分は四馬路を中心として三四回ほど転住してみた。

……歐陽君が久し振りに訪れて来て、どうだえ、私の近処へ引越してみても「それも面白からう」と身体一つより外、何物も持たぬ自分は早速左記の処へ引き移ったり。……淡水路麗水坊一三三四張方井上紅梅「支那風俗」二卷二号（大正八年四月）「編輯だより」参照。

【三十一】「近々一寸田舎に出掛けるので麗水坊の寓居が引き払います。僕に何か御用事のあるお方は左記の処へ 上海武昌路七一號上海經濟日報社内井上紅梅「支那風俗」二卷五号（大正八年九月）「編輯だより」参照。

【三十二】「蘆澤印刷所に半月ほど原稿を寐かされた上、尚お十日も手がつけれないといふ御宣託を頂戴した今度は大にマゴついたのである。そこで印刷所を替えた（筆者注・上海武昌路七一號 上海經濟日報社）ので、大遅れに遅れた「支那風俗」二卷三号（大正八年七月）「編輯だより」参照。

【三十三】「支那風俗」三卷二号（大正九年四月二〇日 発行兼編輯人 上海武昌路一七五号 飯田雄三 発行所 上海武昌路一七五号 支那風俗研究会 売捌所 日本堂 申江堂 至誠堂 印刷所変更 大阪市東区南農人町一丁目三二 関西印刷所 売捌所 大阪市東区平野町 柳屋書房）。

【三十四】「大阪から寄附金に就いてお問合わせになった方がありましたから、一寸お答え申して置きます。本会へのそれは、此種の雑誌の経営困難なる事を御察しある人達の暖い同情に過ぎませんので別に之れという規則は設けてありません唯寄附しようという御厚意を有難く申し受け、その返礼として発行の雑誌を毎月一部ずつ贈呈致しておるわけです、又会員云々に就いては本誌と趣味と同じうせらるる方は皆会員です、殊に現代の支那に関する趣味記事の御寄稿は大に歓迎致しております。上海武昌路七一號上海

經濟日報社気付 井上紅梅「支那風俗」二卷六号（大正八年一月）「編輯だより」参照。

【三十五】「支那風俗」三卷五号（大正一〇年一〇月二〇日印刷同日発行 発行兼編輯人 上海武昌路一七五号 飯田雄三 印刷所 蘆澤印刷所 発行所 支那風俗研究会 申込所 上海文路二七号 日本堂書房 売捌所 日本堂 申江堂 至誠堂 東京 東京堂 大阪 盛文堂 柳屋書店 大連 大阪屋号書店）。

【三十六】日本語初の麻雀文献は上海出版の肖閑生『麻雀詳解』（一九一六年）だが、現存する資料が少なく詳細は不明。その後、大正一二（一九二三）（二四）年頃から日本で麻雀の関心が高まると、紅梅はそれに呼応して『家庭遊戲 麻雀の取方』（日本堂書店、一九二四年）を出版、国内最初の解説本である林茂光『麻雀 支那遊戲』（華昌號、一九二四年）とはほぼ同時に刊行を果たした。現在紅梅の名前は寧ろ「麻雀普及の祖」として紹介されることが多いのは、この経緯からである。

【三十七】「次号予告 本紙第二卷は本号を以て終刊、次号第三卷第一号は普通号の三倍大として大正九年一月一日発行の予定也。支那服の新傾向（約四十頁）京劇脚本二種（約四十頁）酒令の話（約十頁）支那社会小説（約二十頁）上海暗黒面の解剖（約二十頁）支那料理の話（約四十頁）賭博研究（約二十頁）花食う人（約十頁）支那花柳巷談（約二十頁）支那劇研究（約三十頁）」（『支那風俗』二卷六号）九九頁参照。

【三十八】「支那風俗」三卷一号（大正九年一月）の「編集便り」には「編輯子病気の為め、新年号として予定のような華々しいものを出す事が出来なかったのは、甚だ遺憾であると同時に、愛読者諸君に対して重々お詫びをしなければならぬ。だが本号記事の内容に就いては遙々満洲から上田恭輔先生の御応援あり、徒に紙数を増大するよりも却て資質を旨とする方が、

読者に対して忠実ではあるまいか、と病に力め自分も出来得る限りの努力をした結果、遂にいつもと同じようなものが出来ました」と弁解している。

【三十九】紅梅『支那女研究香艶録』（支那風俗研究会、大正九年四月）。

【四十】紅梅『支那風俗（巻上）』（日本堂書店、大正九年二月）。

【四十二】紅梅『支那風俗（巻中）』（日本堂書店、大正一〇年四月）。

【四十二】紅梅『支那風俗（巻下）』（日本堂書店、大正一〇年五月）。

【四十三】紅梅の親友・寺田寅彦の日記、大正九年五月二十四日条に、「井上進のはがきが学校へ来て居た。七年目で帰京したといふ」寺田寅彦全集（二）四七頁参照。

【四十四】寺田寅彦の日記、大正一〇年三月二〇日条に、「午後井上進君来る。

近日又上海へ行く何首鳥の輸入をやる由」とある。『寺田寅彦全集（二）』一三九頁参照。なお、紅梅は大正三年から約一年間、杭州の薬剤商に勤務していたほか、大正一三年にも蘇州回春大薬院に勤務しているので、漢方薬には相応の知識があった。

【四十五】芥川龍之介『上海游記』（大阪毎日新聞、大正一〇年八月〜九月）。

【四十六】島津四十起の詳細については、和田博文『上海在留日本人の出版活動——島津四十起と金風社』（『アジア遊学』六二号、二〇〇四年）を参照のこと。

【四十七】「大正八年九月初旬、金風社の島津氏が『上海案内（第七版）』（金風社、大正六年三月三〇日刊）を改訂するから支那料理に関して何か書けとの御注文。そこで自分は早速当時の料理屋の模様を調べて此稿を纏めてみた。……大正八年一二月四日紅梅識」（紅梅『上海料理屋評判記はしがき』『支那風俗（巻上）』（日本堂書店、大正九年二月）七八頁参照。島津氏の改訂版は『上海案内（第八版）』として金風社から大正八年一二月に刊行された。

【四十八】島津長次郎『上海案内（第九版）』（金風社、大正一〇年二月）二九頁参照。

【四十九】『近代中国都市案内集成 上海編（一〜一二）』（ゆまに書房、二〇一二年）では、全一〇巻のうち、第一巻から第五巻までが①『上海案内』（第一版・第七版）②『上海案内』（第八版）③『上海案内』（第九版）④『上海案内』（第一〇版）⑤『上海案内』（第一一版）で構成されている。そこからその重要性がうかがえよう。

【五十】紅梅自身もこれら支援者の不満や離反には大いに悩まされていた。そのため書籍版『支那風俗』の序文には「自分は感謝する。雑誌『支那風俗』の後援者と其愛読者諸君に。そうしてそれ等の人は過去三年間自分を励まし、自分の感興を傷つけぬように終始親切に愛護してゐて呉れた事を。……自分は終りに後援者諸君の姓名を記して更に感謝の意を深める。」として、支援者四〇名の氏名を逐一掲げるなど最大限の謝辞を述べている点からも理解できる。

【五十二】『支那風俗』三巻三号（大正一〇年八月）巻頭文、大正一〇年六月二六日記。

【五十二】「上海なる者、殊に四馬路の淫蕩なる空氣に殆んど倦み劳かれた自分は、大きな支那といふ者に対してまでも愛想が尽きそうになって来た」『支那風俗』二巻二号（大正八年四月）「編輯だより」参照。

【五十三】『支那風俗』二巻五号（大正八年九月）「編輯だより」参照。

【五十四】島津長次郎『上海案内（第九版）』（金風社、大正一〇年二月）の「邦人案内」所載の「邦人一般の営業別索引」には上海在留邦人企業の一覧があり、大半の企業には電話番号が掲載されているが、「支那風俗研究所」の欄には「上海経済日報気付」とあるだけで、電話番号の掲載も行われていない。『上海案内（第九版）』『邦人案内』一五頁参照。

大正時代上海に於ける「支那風俗研究会」について——井上紅梅による白話小説翻訳作業の前史として——

【五十五】寺田寅彦の日記大正九年十二月一九日条に、「井上進君来る、十年振程の邂逅なり。八年來辛酸の話を聞く」（寺田寅彦全集（二二）一一六頁参照）。

【五十六】紅梅『支那風俗（卷上）』日本堂書店、大正九年十二月）序文一頁参照。

【五十七】紅梅『支那風俗（卷上）』日本堂書店、大正九年十二月）序文一頁参照。

【五十八】紅梅「支那の新文芸——張資平『寒流』」『日刊支那事情』大正一五年五月一八日条参照。